

# 容疑者 室井慎次

2005(平成17)年8月10日鑑賞(東映試写室)



監督・脚本＝君塚良一／出演＝柳葉敏郎／田中麗奈／柄本明／哀川翔／真矢みき／寛利夫／八嶋智人／大和田伸也／津嘉山正種／佐野史郎（東宝配給／2005年日本映画／117分）

……『踊る大捜査線 THE MOVIE』『踊る大捜査線 THE MOVIE 2 レインボーブリッジを封鎖せよ！』の脇役キャラである管理官室井慎次を主人公とし、『交渉人 真下正義』に続く4匹目のどじょうを狙った映画がこれ。しかし弁護士としての私の目から観ると最悪！ 警察庁と警視庁のトップによる出世争いに巻き込まれて、殺人事件の捜査本部長であった室井慎次が「特別公務員暴行陵虐罪」で逮捕！ この筋書きは面白いものだが、その内容はあまりにもマンガ的！ 新米弁護士を演じる田中麗奈は美人だから許せる(?)としても、灰島弁護士のキャラは一体ナニ？ 日曜日の人気番組である、某法律バラエティ番組(?)の悪影響がモロに出ているのでは……？ 刑事事件に興味のある法科大学院の学生諸君は、反面教師として必見の教材映画！

## 第5章

勉強のあとは…

### 『踊る大捜査線』における室井慎次のキャラは？

『容疑者 室井慎次』は、『交渉人 真下正義』(05年)に続いて、大ヒットした『踊る大捜査線 THE MOVIE』(98年)、『踊る大捜査線 THE MOVIE 2 レインボーブリッジを封鎖せよ！』(03年)に登場したキャラクターを主演として登場させたもの。

私は『踊る……』は2本とも観ていないので、その中で管理官である室井慎次がどんな役割を果たしていたのかは知らないが、私の『シネマルーム』の若い読者諸君はきっと知っているはず。

また、私と同様にそれを知らない年配の人たちは、この映画を観て、またパン

フレットを読んで勉強してもらいたい。一言だけ紹介しておけば、室井慎次は封建的な警察機構の中であえて「上に行ってやる」という生き方を選んだ人物。さてそのココロは……？

そしてそれによる苦悩は……？ ちなみに、室井慎次は東北大学出身とのこと。さてそのココロは……？

## なんともくだらない、警察庁 VS 警視庁

この映画で室井慎次を追い込んでいくことになったのは、警察庁と警視庁の上層部たちの個人的な出世争い。警察機構も官僚機構の1つだから、そのような出世争いがある意味当然だが、この映画でのその描き方はあまりにもマンガ的……？

室井慎次だって、「現場（所轄）と本店（警視庁）の風通しをよくしたい」という思いの中で、あえて封建的警察機構の中で、「上に行って偉くなる」という道を選択した人物。そして今や彼も警視正となり、管理官として、新宿で起きた殺人事件の捜査本部長を務めている立派な警察官僚。

そんな室井慎次を、警察庁と警視庁のトップの出世争いやメンツ争いで逮捕できるの……？

## 特別公務員暴行陵虐罪とは？

室井慎次逮捕の被疑事実は特別公務員りょうぎやくざい暴行陵虐罪。特別公務員暴行陵虐罪とは、裁判、検察、警察の職務を行うかその補助をする公務員が職務を遂行するにあたり、被疑者・被告人等に、暴行・陵辱・加虐の行為をした場合に成立する犯罪。この罪で告訴されたにもかかわらず、検察官が公訴提起をしない場合は、付審判請求（準起訴手続）の手続が刑事訴訟法262条に定められている。

そして、付審判の請求を受けた裁判所が、その請求に理由ありと認めるときは、事件を地方裁判所の審判に付することになり、その場合は公訴提起があったものと擬制される（同265、266、267条）。

さらにこの場合は、公訴の維持にあたるものとして、裁判所が弁護士を指名することになり、この指名された弁護士が公判で検察官役をつとめるという異例の

配役(?)となる(同268条)。

大阪で発生した有名な付審判事件では、私の友人・知人の弁護士が数名これに関与したことがある。しかしこの映画では……?

## 検事もこれでは……?

特別公務員暴行陵虐罪で逮捕された室井慎次の取り調べをするのは窪園行雄検事(佐野史郎)。殺人事件の被疑者として任意に取り調べを受けていた警察官が、取り調べの途中逃走し、白昼まちの中を逃げ回っている途中、車にはねられて即死するという事件が発生。そのためこの殺人事件は「被疑者死亡」により終了したものの、被疑者逃走の原因は室井慎次を捜査本部長とする警察による過剰な取り調べにあったとして、死亡した被疑者の母親が室井慎次を特別公務員暴行陵虐罪で刑事告訴することに……。

この糸を引いたのが、人権派(?)弁護士の灰島だったという構成にはほとんどゲンナリだが、被疑者となった室井慎次を取り調べる窪園検事のスタンスは、至極まともなもの……。

「捜査」はあくまで法律の範囲内で行われなければならないのは当然のことで、窪園検事と室井慎次との論争(?)を聞いていると、私の目にははっきりと検事の方が正論……?

しかし、検事も所詮「現場」の人間! 「上からの圧力」がかかれば、被疑者の「釈放」もやむをえないが、そんなシーンが次々と登場すると、「現場の弁護士」である私も思わずイライラ……?

## 何ともつらい(?)、室井慎次の演技

この映画の主人公室井慎次の最大のキャラは無口(寡黙?)。それはエリート男のキャラとして必ずしも悪くはないのだが、必要なことはそれなりにしゃべってもらわないと、映画を観ている観客はうっとうしくなってくる……?

もちろん室井慎次を演じる柳葉敏郎はそのキャラに合わせて一生懸命演じていることはよくわかるのだが、その程度の内容の話をそんなにもったいぶらなくていいのでは……と思えてくると、何ともその「沈黙」が退屈でバカバカしくな

ってくる……？

セリフではなく表情で表現するということは、演技派俳優としてそれなりの醍醐味のある作業だろうが、この映画ではそれが何ともつらい……？

## しっかりしてほしい、法律監修！

この映画のエンドロールには、法律監修として某法律事務所の名前が流れてくる。しかしこの映画は、弁護士の私の目からみれば最初から法律上の監修が不十分、というよりかなりデタラメ……？

最初に驚いたのは、弁護士が刑事事件の弁護人として被疑者と接見する時、なんと被疑者が手錠をしたまま登場したこと。これは一体ナニ……？

また、私は東京の警察署や拘置所で弁護人として被疑者と接見した経験はないが、関西一円で31年にわたる私の経験では、被疑者との接見時における会話はガラス越しであり、その真ん中部分に小さい穴があいた円形の部分から伝わる声でやっている。しかしこの映画では……？

## 灰島弁護士のキャラのバカバカしさ

灰島弁護士（八嶋智人）は、東大法学部在学中に司法試験に受かった「訴訟パラノイア」という設定。したがって、室井慎次の弁護人となった新米女性弁護士の小原弁護士（田中麗奈）が所属する津田法律事務所のような貧乏くさい（？）事務所ではなく、バカ広くて超豪華な事務所。もっとも、そのバカでっかい会議室（？）には本は1冊もなく、会議テーブルの上にあるのも数台のノートパソコンだけ。さらに灰島弁護士は、外にいるときはいつもテレビゲームを楽しみながら話をしているというヘンな奴。

そのうえ、弁護士だから当然かもしれないが、彼がいつも言うのは「法律とは……」「法律は……」という小難しいもので、法律があまり好きでない（？）弁護士の私には、耳につくフレーズばかり……。こんなバカバカしいキャラの弁護士の登場は、やめてほしいものだが……。

## 何ともくだらない法律論争、その原因は……？

映画の中には何回も「法律論争」が登場するが、その99%は灰島弁護士が述べるもの。そして、どうもそれが絶対的に強いらしい……？ 新米弁護士の小原はいつもやられっ放しのうえ、室井慎次も全然太刀打ちできていない。この映画後半での室井慎次による少女の取り調べシーンで展開される論争(?)は、この映画のハイライトシーンであると同時に最もバカバカしいシーン……？

工藤刑事(哀川翔)による目茶苦茶な少女への追及を見て、思わず灰島弁護士は「……」と口走った。すると、それまで99%灰島弁護士に言い負かされていた小原弁護士はそれを聞いて俄然巻き返し！ 今度は灰島弁護士に対して「弁護士会に懲戒申立をする！」と宣言した。この弁護士会への懲戒申立を脅しに使ったのは灰島弁護士が先だったが、対抗上とはいえ、そのような風潮が映画にまで登場するとは世も末だと、私などは思えてしまっただけ……！

そして私は、この何ともくだらない法律論争を面白おかしく映画に登場させたのは、日曜日の晩にやっているあの人気の某法律バラエティ番組のせいでは、と思っているのだが……。

## 新宿北署って、こんなにヒマ……？

新宿といえば、かの悪名高き(?)歌舞伎町をかかえた町。その歌舞伎町が、新宿北署の管轄内に入っているかどうか私は知らない。しかしそれがどうであっても、外国人犯罪が「激増」し、犯人検挙率が「激減」している新宿区内の警察署は、日々犯罪捜査に忙殺され走り回っているはず、と私は思っているのだが、この映画では、新宿北署を代表する現場の刑事(?)である工藤刑事をはじめとして、わりとヒマそう……？

いや、そう言っちゃ失礼で、常日頃は捜査に走り回っているのかもしれないが、コト捜査会議や容疑者の少女を任意出頭させて、取り調べするとなると別……？ 前述の室井慎次による「取り調べ」のハイライトシーンには、何と新宿北区の警察官をはじめとする「傍聴人」が山なり……？ 私が勉強した限りでは、被疑者の取り調べは当然密室の中のはず。そしてまた、そうだからこそ、刑事訴訟法のさまざまな問題が出るものなのだが……？

## 日本でも、弁護士立会いの取り調べがあるの？

法律監修の法律事務所がついていながら、何度も言うように、この映画のハイライトシーンである室井慎次による少女の取り調べシーンは、まるで公開の法廷のよう。

そもそも、やっと決心して(?)退職届を出した室井慎次が、捜査本部長として「少女の取り調べをやる!」と宣言するのもおかしいし、イザ少女に質問しようとする、その少女の弁護人である灰島弁護士が正義の味方然として登場し、「取り調べに同席させていただく!」と宣言するのもヘン! さらに輪をかけてヘンなのは、それまで半分死んでいた(?)ボス弁の津田誠吾(柄本明)とともに小原弁護士が登場し、「私も立会います」と宣言すること。

私が勉強した限りでは、警察官による被疑者の取り調べに弁護士が立会うことができるかと教わったことはないし、日本で弁護士を31年間やってきた限りでは、そんな経験は1度もない。もしホントにそんなことができるのなら、私がこれまでに刑事事件で勝ち取ってきた無罪判決5件という実績はさらに増大しているはず……?

この映画の、このハイライトシーンは、昨年4月に発足した法科大学院で刑法や刑事訴訟法を学ぶ学生には、反面教師として必見の教材映画となるはず!

## 脚本も君塚良一氏だが……?

この『容疑者 室井慎次』の脚本を書いたのは、『踊る……』シリーズすべての脚本を手がけ、『踊る……』のすべてを知り尽くしている君塚良一監督。『交渉人 真下正義』はアメリカには存在するものの、日本にはまだ珍しい「交渉人」を主人公としたため、多少の法律上のインチキ(?)は許容されたが、殺人事件の捜査本部長が特別公務員暴行陵虐罪で逮捕され、警察庁 VS 警視庁、灰島弁護士 VS 小原弁護士という「法曹界」のすべてを出し切ったようなこの映画で、いくらマンガ的とはいえ、ここまでインチキ的な描写をするのはどうも……? 私としては、脚本を書いた君塚監督の意図がどうにも理解できないが……?

## 見せたくない官僚機構上層部たちの姿！

子供たちや法科大学院の学生たちに見せたくない官僚機構上層部たちの姿をタップリと見せてくれるのが、この映画最大の効用……？

折しも、去る8月8日の参議院本会議での郵政民営化法案の否決により、衆議院の解散、総選挙へとなだれこんでいったが、その展開の中で政治家たちの生々しい生態が見えてきている。私は、郵政民営化法案に賛成か反対かという争点の設定は当然のことであり、その意味で小泉総理の信念と行動力にホトホト感心している。

彼が今、織田信長やガリレオ・ガリレイと同じ心境の中、とにかく全力投球でこの争点を訴えれば、ひょっとして小泉改革を支援する新生自民党が選挙に勝利するのでは、と私は秘かに期待しているが……。

## こんな少女がニッポンを壊すのでは……？

「犯罪のカゲに女あり」というのは昔からの格言(?)だが、この映画に登場する室井慎次を捜査本部長とする「殺人事件」の本質も実はそうだった……？

この格言は人間本来の(?)ドロドロしたものがまつわりついたイメージだが、この映画での殺人事件は、そういうイメージとは全く異質のもの。そして、ある意味でこの映画のストーリー構成のキーマン(ウーマン)となるのは、セリフが極端に少ないかわいい1人の少女。セリフが少ないのは灰島弁護士が「しゃべる必要はない！」と強力にガードしているためだが、最後にこのかわいい少女が放った言葉は衝撃的……？そして、ああ、こんな女の子がニッポンを壊すのでは、と思わずためいきが……？

2005(平成17)年8月11日記